とばっちりの釣り侍

神尾水無子

ALPHIAPOLIS

目次

一章　5
二章　72
三章　133
四章　191
終章　255

一章

一

加賀の空と犀川が、鏡のように互いの青を映し合う。青の深みには底がない。卯辰山から吹く風に、鳶が弧を描く。河原の露草たちが咲もうている。

川のそこかしこに、加賀前田本家家臣団が立っている。白い瀬が立つ中、各々が泰然と竿を構えている。

「おう、某の方はあと一匹でツ抜けか。やりおるの」

「何の、某は数ではない。いかによき型の鮎を釣るかが勝負じゃ」

朗らかな笑い声が河原に届く。飛沫とともに、鮎が勢いよく釣り上げられた。

遠野八十助だけが、腐りきっていた。河原で膝を抱え、家臣らを睥睨する。

「くそ、あいつらに片っ端から礫を投げつけてやりてえ。なんだって俺だけがこんな目に遭うんだよ」

並んで土手に座り、川を眺めている紗江が八十助に顔を向けた。

「さっきから、何なの。どうしてそんなに機嫌が悪いの」

竿を振っている家臣の一人が大声をあげた。釣り糸が切れたらしい。

「八十助、ご家来さまが呼んでいらっしゃる、ほら」

紗江が川を指す。八十助は不知顔で、膝に顎を載せた。

「ねえ、呼んでるってば」

紗江が肩を揺する。

「うるせえな」

「だってご家来衆の鮎釣りの差配は、八十助のお務めでしょう。早くお行きなさいよ」

「もう俺の仕事じゃねえんだよ」

大声で笑いだしたくなった。けれど口をつくのは、みっともなく上擦った声だ。

「俺は、大聖寺前田家へ飛ばされる」

意味もなく空を眺めた。紗江はいつもの、ちょっと冷ややかな面様を崩さず、八十

助の次の言葉を待っている。

いっそ仰天して河原に引っくり返ってくれたほうが、よほど気が楽なのに。

「上士の莫迦息子をぶん殴っちまった。それだけの話だ」

紗江がおもむろに立ち上がった。八十助の傍らに置かれた道具箱の中を、あさり始める。

「おい、お紗江、何をしておる」

紗江は応えず、釣り糸を巻いた糸車を取り出した。

「お紗江、だから何を」

「あんたがやらないなら、あたしがご家来さまの糸を替えてくる」

言うなり足早に川へ向かう。

「おいっ、俺の話はどうなった。俺は加賀から追い出されるんだぞっ。鮎釣りなんざ、どうでもいいだろうが。いくら釣り道具屋の娘だからって、でしゃばるなっ」

紗江が立ち止まった。振り向き、片頬だけで笑う。

「いつかは莫迦な真似をやらかすと思ってた。だからあたしは驚かない。あんたの性分じゃ、遅いくらいよ。お細工奉行所の小頭になって二年、まさか正徳二年（一七一二年）までもつとはね。そっちのほうがよっぽど魂消るわ」

「何だとっ。前田本家の臣に向かって、無礼だぞ。このおかめが」
「上士の息子をぶん殴っておいて、それだけの話のわけがないでしょう。そういうところが駄目なのよ。あんたはもう前田本家の家来じゃない。大聖寺前田家のご家来なのでしょ。向こうでまた飛ばされたら、その先には流刑地の舳倉島しかないからね」
「黙れ黙れ黙れっ」
紗江が幽かに目を細めた。
「一度、八十助も」
釣り糸を切らせた家臣もほかの家臣も、ただならぬ二人のやり取りに、手を止めて茫と見ている。
「海に出て揉まれてごらん。ここのウラナイさまみたいにね」
八十助の応えを待たず、下駄を放り出すように脱いだ。
「あいやっ、紗江どのが自ら川へ入られるなぞ」
「そうですぞ、釣り糸くらい某どもで直す。早う岸へ上がりなされ」
紗江の実家《加賀針忠兵衛商店》は、天正五年（一五七七年）から続く、鮎釣り道具の老舗だ。前田家の祖である前田利家が贔屓にしたことで知られている。看板娘を張る紗江は、誰もが一目を置くお嬢さまだ。

紗江はためらいなく裾をからげ、川へ入った。
「竿を倒して下さい。あたしが役立たずの八十助の代わりに、糸を替えます」
「いやいや、そんな真似は」
「早く倒して、竿先をこちらへ向けて下さい。あたしは釣り道具屋の娘です。八十助なんかより、よほど上手く結び直しますから」
言い放つ紗江に、家臣は恐縮しながら竿を倒した。
「けっ、やってられるか、莫迦どもめ」
頭の後ろで手を組み、八十助は仰臥した。川から飛び立った青鷺だろうか。白い羽が数瞬、陽射しを遮った。
八十助は小頭の一人として、鮎釣り道具の差配をしている。お細工奉行所は現加賀四代当主、前田加賀守綱紀によって敷かれた。小頭たちは、それぞれ諸頭（諸役所の奉行の呼称）のもと、お細工者を掌握する。
お細工者は町の職人から取り立てられる。武具、細工、弓矢、鉄砲、釣り道具などに分けられ、取り立てられれば、苗字帯刀ご免の侍士分と相成る。上中下の格付けがなされ、まともに切米の付与につながる。だが、格付けは加賀守の気分次第で、ころころと変わる。

お細工者は格付けを何とか上げてもらおうと、小頭に文句を垂れたり懇願したり、時に恫喝までやってのける。

腕に覚えがあるせいで、やたらと居丈高なお細工者と、当主の顔色ばかりを気にする諸頭。小頭の八十助は常に板挟みだ。

釣り竿や釣り糸、川虫を模した加賀毛鉤の手配、さらに川では家臣らの場所取りの差配もこなさねばならぬ。

鮎釣りは場所取りが肝だ。手練れの家臣は皆、口を揃える。

〝ウラナイさまは、縄張りをお持ちの魚だからな。勢いのあるウラナイさまほど、いい場所を陣取っておる。そこへ縄張りを持たぬ遊び鮎、つまり流しのウラナイさまが来ると、がーっと牙を剝いて追い払う。つまりは場所の見極めが、勝負の胆よ〟

ゆえに上士が川に入るとなれば、下士はせっかく目をつけた場所でも、即座に譲らねばならぬ。とはいえ竿先から道糸、鉤素まで数えると三丈（約九メートル）もの長さになる。「ちょいとズレてくれませぬか」ではすまない。八十助は年下の若党にも頭を下げて回る羽目になる。

聞こえよがしに叫んでやった。

「なーにがウラナイさまだよ。くっだらねえ」

〝神功皇后が肥前松浦の玉島で、新羅征討の戦勝を占うために釣った魚が鮎だった〟

〝神武天皇が御東征の折りに、大和は吉野川の簗漁で見た魚が鮎で、鮎の神さまからご神託を賜った〟

諸説紛々としているが、誰もが親しみをこめ鮎をウラナイさまと呼ぶ所以だ。

「知るか。そんなことはどうでもいいんだよ」

六日前、河原で場所取りに揉めている家臣を見かけた。またか、とうんざりしながら仲裁に割って入った。

だが諍いは取っ組み合いに発展した。一人が繰り出した拳がたまたま、八十助の右頬に入った。

たちまち腫れあがった頬を摩りながら、考えた。背後では、取っ組み合いが続いている。

毎日毎日、おまんまが懸かっているとはいえ、格上げばかりを迫るお細工者の連中と、あからさまに掛かり合いを避ける諸頭ども。

毎日毎日、お細工奉行所とお細工者の間を、汗だくで往復する己。

背後で鮎の縄張り争いよりも、野暮な喧嘩を続ける家臣ども。

今にして思えば、魔が差したのやも知れぬ。

八十助は振り向きざまに、己を殴った奴に拳を叩きこんだ。そいつは頬を押さえながら、小娘のように涙声で叫んだ。

「や、八十助と申したなっ。たかだか小頭の分際でっ。お前なんか、某が父上に言いつければ、どうにでもできるんだからっ」

そいつが叫んだ通り、父親がご算用場の元締役なのは痛かった。ご算用場は御公儀でいうところの勘定奉行。お細工奉行所より、はるかに格上だ。

八十助の転落が始まった。改易こそ免れたものの、五日間の謹慎の後、大聖寺前田家への左遷を命じられた。

役職は変わらぬが、百万石を誇る前田本家から七万石の大聖寺前田家への大降格は、想念をはるかに超えた左遷だ。

勢いをつけて半身を起こした。道具箱を抱えると紗江には目もくれず、川とは反対側へ土手を降りる。

城下へ続く小道の向こうから、兄弟らしき男子が駆けてきた。六つくらいの兄が肩に担いだ笹には鮎が三尾、ぶら下がっている。

「待て。その鮎は、どうした」

あっという間に追いついた紗江が、背後でぼやく。

「子供相手に、何を偉そうにいばってるのよ」

兄弟は、そっくりな幼い顔を上げた。

「えらい格好のええお侍さまから貰った。遠慮するな、言うてた」

「何と申す者か」

「知らん。背の高い、女子みたいな顔したお兄さんや。桃色の着物がきれいやった」

あいつか。八十助は高坂雪之丞の、役者顔を思い浮かべた。

同じお細工奉行所の小頭だが、雪之丞は蒔絵と象嵌の差配が仕事。さらに当主直々のご用向きに応じ、御公儀や諸藩大名への進物も手がける。扱う品の華やかさは、城内の女中たちや芸妓衆が「加賀光君」と渾名する美丈夫ぶりに似合っている。

雪之丞も鮎釣りをするにはするが、魚嫌いだ。ゆえに釣れた鮎は、平気で町人にくれてしまう。

「よいか。鮎釣りは武家にのみ許されたものだ。鮎を持っておるところを見つかれば、人目を盗んで釣りをしたと思われ、お前らの親に咎が下る」

兄はにわかに顔を強張らせ、短い袂で鮎を懸命に隠そうとする。

「さっさと帰れ。誰にも見つかるな。騒ぎになれば、こちらも迷惑をこうむる」

兄弟は無言で、一目散に駆けて行った。

「あんなに脅かすことないでしょうに」
振り向きざま、紗江に噛みついた。
「ついて来るな。家臣どもの前で恥を掻かせやがって。なんだ、あの口の利きかたは」
紗江は涼しい顔で、道沿いに並ぶ空木の花を眺めている。
「鮎をあの子らにあげたのは、雪之丞よね」
「おい、俺の話を聞いてるのか」
続ける気も失せ、舌打ちをした。
幼なじみの雪之丞は、己の左遷を知っても面様を変えなかった。幼い頃から八十助と雪之丞の後をついて回っていた紗江も、妙に恬淡としている。
何で平静なのだ。いや、こいつらは心の裡では舌を出しているのやも知れぬ。
頭を掻きむしった。心持が勝手に作る嫌たらしい輪にはまりこみそうだ。
「もう放っておいてくれ」
歩き出すと、袂を引かれた。
「大聖寺のお務めは、いつからなの」
八十助を見上げる紗江の額や頬に、若葉の陰が模様を描く。切れ長の目には、若い

緑が映りこんでいる。
紗江に心ときめく家臣は、数多にいる。
小頭の八十助を素通りし、紗江を目当てにしげしげと《加賀針忠兵衛商店》に通う家臣は少なくない。
それとて、もうどうでもいい。
「引き継ぎをすませたら、すぐだ。大聖寺にまで来るんじゃねえぞ」
「あたしがいなかったら、心細いくせに」
「ほざいてろ」
紗江の手を振り切り、城へ向かう。こうなったら金輪際、一切合切、滅法界、城内になぞ足を踏み入れたくないが、残りの務めがある。
紗江が独り言のように呟く。
「ウラナイさまは卵から孵ったら、海に下って懸命に生きる。大きくなったら生まれた川に帰って、夫婦になる。おとっつぁんが、そう言ってた」
それがどうした。
だが口を開く寸前に、紗江は背を向けて歩き出した。
舌打ちをしながら目を転じると、土手越しに長い竿が、あちこちで揺れている。

「おっ、ついにツ抜けだねえ」
何とも長閑な声が癪に触る。

二

お細工奉行所に戻り、後任の小頭に引き継ぎを行うと、その日の八十助の仕事は終わってしまった。
《加賀針忠兵衛商店》が毛鉤や釣り糸、加賀竿まで一手に引き受けているので、家臣が使う釣り道具の差配は難しいものではない。
「ま、加賀守さまやご用所（家老や側用人など重臣による組織）の御方からご用命を拝した折りには都度、諸頭に相談されよ」
八十助がまとまり悪く締めくくると、後任も曖昧に頷く。
大聖寺への家移りは寿ぐ類ではない。ゆえにか諸頭も小頭も八十助から距離を置き、はなむけの言葉もない。八十助は無言で会釈をすると城を辞した。
「二年の間、ともに務めておったのに薄情な奴らだ」
惣構を出た所で、堀沿いの柳の下に佇む男が目に入った。桃色の肩衣に、銀色にも

見える薄灰鼠の袴。袖には揺れる葦が描かれている。男は柳の葉を斜にくわえていた。
また格好つけていやがる。八十助は正面に立つと睨みつけた。
「これはこれは加賀光君。お前に投げる礫はあっても、おひねりはないぞ」
雪之丞は、涼しく応える。
「お前さんの門出の祝いをしてやろうと、待ってたんだ」
「余計な世話だ。てめえだって肚の中じゃ、嗤っているんだろ」
雪之丞は、幽かに口の端を歪めて笑った。この男は女子がそばにいなければ、かなり嫌みな笑いかたをする。
「聞いたぜ。お紗江に河原でやりこめられたんだってな。恨めし屋で疑り深いお前さんにはいい気味だ。だが幼なじみの某まで疑うのは心外だねえ」
「何だよ、恨めし屋って。お紗江は最近とみに、つんと取り澄ましやがってんだよ」
雪之丞がちょっと眉を上げる。
「不器用なんだよ、あいつは。餓鬼の頃から知ってるだろ。もちっと優しくしてやれよ」
八十助は鼻で嗤った。
「何が不器用だってんだ。くそ生意気なだけじゃねえか」

「八十助」
「何だよ」
「お前は生粋の莫迦だな」
「何だとっ」
雪之丞の胸ぐらを摑みかけるが、ひらりとかわされた。
「八十助、とりあえず呑みに行こう。しばし、お前さんの面を拝めぬからな。それとも某のお手つきでよければ、女をあてがってやろうか」
夕刻を知らせる涼やかな風に流すように、雪之丞はくわえていた柳の葉を吹いた。葉は風に上下し、いずこかへ飛んでゆく。
長い睫と細くまっすぐな眉、薄い鼻梁は幾度と見ても、そこいらの女子よりも端正だ。柳の葉を目で追うさまなぞ公方さまが見たら、即座にお小姓に上げそうだ。
「女なんかどうでもよい。酒を呑もう」
皆から避けられたまま、冷や飯を食わせてもらっている兄夫婦の家に戻るのは、あまりにみじめだ。
西茶屋町には安くて気の利いた肴を出す居酒屋が多い。一軒の暖簾を分けた時、背後から声がかかった。

「よう、今日で務めも終いだってな。ご苦労ご苦労」
妙に高い声でわかる。己が殴った、元締役の莫迦息子だ。
「秀次郎どの、だったかな。尾けておったのか。そっちこそご苦労ご苦労」
振り向くと、また拳が飛んでくると思ったらしい。素早く秀次郎が下がる。背後に立つ二人の腰巾着が気色ばんでいる。
一人は猪に似たごつい顔が強そうにも、愚鈍にも見える。一方は狐顔の、いかにも性根が捻くれていそうな奴だ。
狐顔が懸命に凄む。
「また秀次郎どのに手を上げたら、容赦せぬぞ。貴様の家は代々、小頭止まりだろうが。秀次郎どのは父御を継いでご算用場の元締役も必至。今度こそお家断絶と相成るぞ」
「大袈裟な。斬った張ったじゃねえんだからよ」
うんざりと背を向けた。だが秀次郎が囃したてるように、甲高い声をあげる。
「大聖寺の殿さまのお仕えじゃ、苦労も多いだろうな。何たって、たったの七万石。ご愁傷さま」
そこは八十助も異論はない。だが、こいつに揶揄される謂れはない。

「いつまで絡んでんだよ。この店に入りたいのなら、俺らが河岸を替える。おい雪之丞、ほかに行くぞ」

肩を秀次郎にぶつけながら、通りに出ようとした。

「貴様っ、いまだにきちんと詫びもせず、開き直るつもりかっ」

秀次郎が喚く。通りを行き交う、武家や町人らが足を止めた。

「ごめんね」

秀次郎の耳元で囁くと、一気にその顔が赤黒く染まった。

「もう、そろそろいいだろう」

振り返ると、雪之丞が居酒屋の壁にもたれ、懐手で眺めている。

雪之丞は見物人が増えるほどに、はりきる。今も町人らの耳目をたっぷりと惹きながら身を起こす。

「秀次郎どの、某も小頭だ。文句があるなら拝聴しよう」

片頬に笑みを浮かべ、流し目をくれる。遠巻きに見ている女子衆が溜息をつく。

「何だ、貴様。女形はすっこんでろ」

猪顔が睨みつける。雪之丞が目を細めた。

「いいのかい」

「へっ、何がいいのかい、だ。格好つけやが――」

終いまで言わぬうちに、猪顔が崩れ落ちた。何が起こったかわからぬ秀次郎と狐顔は、茫と見下ろしている。

八十助だけが得心している。雪之丞は瞬時に、猪顔の喉元に手刀を薙いだ。

雪之丞が涼しげな顔で懐手に戻す。

秀次郎がいっそう甲高く叫んだ。

「貴様、何をするっ」

「この男に構わぬほうがよい」

八十助が割って入った。秀次郎に囁く。

「雪之丞は、富田流小太刀の遣い手だ。しかも、相当に質が悪い遣い手だ」

秀次郎が目を剝いた。

「何をほざきよるっ。そもそも加賀では大っぴらに武芸など――」

「そこが雪之丞の質が悪いところだ。奴は刀なぞ抜かぬ。奴の得物は革を巻いた一尺三寸（約三十九センチメートル）の棒だ。その棒で、相手を滅多打ちにする。富田九郎左衛門（富田流の祖）気取りさ。今のだって腕がぶつかった、で押し通すぞ」

雪之丞は通りを行く芸妓衆に片目を瞑っている。

「もうそろそろ、ほんによろしいでしょう」
背後から、のんびりと声がかかった。
福々しい初老の男が立っている。品のよい藍染めの上田縞に、根岸色の羽織姿。羽織は上等な絹と知れた。上田縞の裾には、裏地に配した薄柳色が覗いている。
笑みを浮かべたまま、男は秀次郎に向き合った。それだけで相手を圧する貫禄を放っている。男がゆったりと頭を下げた。
「平素は手前どもの道具立てをご愛顧賜りまして、加賀のお武家さまにはいくら謝辞を申し上げても尽きませぬ」
「――どちらさまでしたっけ」
秀次郎が周章する。八十助は、我ながら意地悪く囁いた。
「《加賀針忠兵衛商店》の店主、忠兵衛どのだ」
「げっ。お紗江の父御であられるか」
忠兵衛は、さらに深々と腰を折った。
「手前に免じて、どうか治めて下さいませんか。この通りにございます」
秀次郎も紗江に岡惚れしているらしい。耳まで真っ赤に染めている。それでも何とか虚勢を張った。

「大聖寺で野垂れ死んじまえ。お前なんか一生、加賀に戻らせないからな」
踵を返す。狐顔が伸びたままの猪顔を引きずり、慌てて続く。
三人が遠ざかると、忠兵衛はやおら向き直った。
「これ坊たち、悪ふざけが過ぎますよ。八十坊や、紗江からあらましは聞きました。口惜しい心持はわかりますが、腐っていても詮ないことです」
二人を幼い頃から知っている忠兵衛に、八十助と雪之丞は揃って頭を下げた。
「八十坊、兄上に心配をかけてはなりませぬ。冥府でお父上とお母上も、気を揉んでいらっしゃいます。雪坊も、母一人子一人の暮らしでございましょう。すぐに手を出すのは、もうお止めなさい」
忠兵衛の説教を、二人は黙って拝聴する。いつもの流れだ。
「さ、では呑みましょう。手前が八十坊のはなむけに奢りますよ」
暖簾を分けながら、忠兵衛はにっこりと笑った。
店内はたいそう賑わっていたが、散胆前役（加賀城下に敷かれた組合の顔役）の忠兵衛は、奥まった腰かけにすぐに通された。
「親父さん、いくつになったっけ。そこいらの田舎大名より風格が出てきたな」
雪之丞が、のんびりと問うた。

「今年で五十六です。手前はただの釣り道具屋に過ぎませんよ」
「親父さんが三十七の年に、紗江は生まれたのか。若い後家さんってのはいいねえ」
雪之丞のからかいに、忠兵衛は澄ました顔で応える。
「意気軒昂ぶりでは、加賀守さまには敵いませんよ。加賀では永らく鮎釣りを推奨されておりますが、ここまで盛んになるとは想念できませんでしたな」
「何だって前田家家臣ばかりが、鮎釣りなんざに励んでるんだよ。俺は鮎釣りのせいで、こんな憂き目に遭ったんだぜ」
八十助は憮然と盃を取り上げた。雪之丞が酒を注す。
「そりゃあ、微妙公（三代当主・前田利常）さまが定めた侍屋敷割によるだろ。百石に満たぬ者にまで屋敷地が与えられたから、城下の侍は千を超えた。そいつらが一斉に刀を振り翳したらどうなる。御公儀は常に加賀を用心している。あからさまに武芸の鍛錬をするより、鮎釣りで心身を鍛えておくほうが、御公儀も安心するだろ。さ、もっと呑め呑め」
ちっとも酒が美味くない。絡み酒を承知で、雪之丞に迫る。
「そういや、また今日も子供に鮎をくれてやったろ。誰かに見つかったらどうすんだ。この浅慮野郎が」

雪之丞は前垂れ娘を眺めながら、軽く笑った。
「あんな刻に務めも鮎釣りもせずに、うろついてるのは八十助くらいのものさ。ちゃんと考えているよ」
「その噂の鮎ですよ、忠兵衛の旦那さま。今年の初物よ」
女将が三人の間に、皿と小鉢を丁寧に置いた。
「走りの若鮎は骨が柔らかいから、背ごしがいいと思ってね。あとはやっぱり、塩焼きよね。ワタは鰹鰾にしたわよ。味がなじんだ頃に出してあげるわ」
「何だよ、背ごしとか鰹鰾とか。どうせ生臭いだけだろ」
魚嫌いの雪之丞がぼやく。
「雪坊は、相変わらずですな。背ごしは、鮎のぶつ切りの刺身で、鰹鰾は取り除いたワタの塩漬けですよ。酒肴には、これが一番」
「某はいらないよ。それより女将さんのほうが美味しそうだ」
忠兵衛と雪之丞は、軽口で八十助を気遣っている。だが、大聖寺家への出仕は心持を重くするばかりだ。自棄になって盃を呷ると、紗江の言葉が過った。
〝海に出て揉まれてごらん〟
何だってんだ、偉そうに。その父親は目の前で、のんびりと塩焼きをつまんでいる。

「こりゃ、きれいな追い星ですな。さぞや、いい縄張りをお持ちのウラナイさまだったのでしょうねえ。さ、八十坊も召し上がれ」

三

大聖寺前田家への出仕、一日目。

規模こそ比べるべくもないが、ここにもお細工奉行所は敷いてあり、諸頭もいれば小頭もいる。目の前の男は小頭の一人で、林田作乃進と名乗った。

大聖寺のお細工奉行所は加賀とは違い、一つの間に武具や工芸諸々の小頭が一緒くたに詰めこまれている。衝立もなく、雑然と並んだ二月堂机の間を常に人が行き交い、何とも落ち着かぬ。

各々が職務に就くふりをしながら、前田本家から来た八十助を注視している気配が伝わる。作乃進が大きく咳ぶいた。

「その、何や。八十助どのはツ抜けやら追い星やら、てんで詳しくない。というより、まるで知らなんだと申すかいな」

挨拶もそこそこに、作乃進から前田本家の鮎釣りについて、あれこれ聞かれた。だ

が八十助はすぐに返答に詰まり、知識の浅さが露呈した。

「呆れたのう。ま、ここではさほど気にすることもないわいな」

見たところ四十に手が届きそうだが、今なお小頭を務める作乃進は、立身出世から外れた家臣だ。いや、己もそうなりつつある。

「誠にあいすみませぬ。不勉学のまま今に至りました。務めは釣り道具の差配がもっぱらでしたので」

毎日の理不尽な務めに、鮎も釣りも心底うんざりだ。知見なぞなくとも仕事に障りはない。開き直りたいが、二人の話は周りの者に丸聞こえだ。

肩をすくめて作乃進が指を折ってみせる。

「〝ツ抜け〟とは、十尾めに鮎を釣った時に使う。数えてみい。一ツ、二ツ、三ツ、四ツ……。九ツの次は十じゃ。だから〝ツ抜け〟」

ちょっと感心する。洒落た物言いを思いつく者がいるものだ。

「〝追い星〟とは、鰓の部分にある黄色い斑じゃ。見た覚えくらいはあろう。立派なウラナイさまほど鮮やかな追い星を持つさけの」

案外と親切に説いている。だが、これからも不勉学のせいで恥を掻くことが多々ありそうだ。早くもげんなりとしてきた。

「作乃進どの、ご教示下さり、感謝いたしまする。時に小頭は作乃進どのと俺、もとい某のほかには」
「おらぬ」
「二人だけですか」
「かつてはもう一人おった。腕扱きの鮎釣り師やったが、いつの間にやら姿を消しおったのう」
うっすらと見えてきた。鮎釣りに関する仕事は、作乃進が一人で行っていたらしい。だが、特に人手が足りぬわけではなさそうだ。もう一人の小頭がふいに消えても、即時に代わりの者を補充することもなかった。
それほどに大聖寺前田家において、鮎釣りの小頭は閑職だ。
障子の向こうに、古城山の若い緑が濃淡を作っている。初夏の風は、ここ大聖寺にも優しい。薫風を吸いこみ、心持を落ち着かせようとした。
「こちらでも家臣は、朝夕に鍛錬として鮎釣りをされておるのでしょうか」
作乃進は、ちょっとよれた感じに見える袴をいじくりながら、うつむいてしまった。
「決まっておらぬのう」
絶句した。

前田本家の家臣は、鮎が遡上する初夏から鮎が落ちてゆく晩秋まで、朝夕の釣りを稽古と称して必ず行う。
稽古場は主に犀川だが、時に山を越えほかの川へ出稽古にも行く。竿と加賀毛鉤の入った箱を抱え、腰には魚籠、頭には蓑笠、雨が降れば重く濡れた蓑もまとう。
その姿で「えい、ほう。えい、ほう」と山を駆ける。足腰の鍛錬だ。
遡上が始まれば、瀬に立ちこんで釣る。流れに足を取られぬようにふんばるため、腹に力を籠める鍛錬にもなる。
盛夏を迎え、川の水が温む頃には、淵と呼ばれる深みに鮎は落ちてゆく。そうなると褌一丁で腰上まで浸かって竿を振る。
「致しかたあるまいの。こちらの家臣は居職や畑仕事をせねば、暮らしてゆけぬ。川に入ったところで、釣れるともわからぬ鮎を追うよりも、菜っ葉でも育てるが先じゃからの。藩の貸付の利子だけでも、青息吐息わいね」
貧乏家中だと承知しているが、これは想念を超えている。胸中を察したか、作乃進が貧相な胸を張る。
「何の。ここ大聖寺にはの、それは上等な絹がある。お内儀絹、いうての。家臣のご新造がせっせと織るんや。それに明暦より色絵磁器が盛んでの、いわゆる九谷焼じゃ。

ま、大機院（大聖寺二代当主・前田利明）さまの代には打ち切りになっとるがの」

拍子抜けした。

貧乏武士の内職と、とうにうっちゃられている焼物なぞ自慢になるわけねえだろ。

「――川を見てまいりたいのですが、よろしいでしょうか」

無気力が、こちらにも伝染りそうだ。作乃進は軽く頷くと、手近にあった帳簿を退屈まぎれのように開いた。

大聖寺川までの道すがら、周囲には青い田が広がっていた。畦道の端に鎮守の杜があり、朱の鳥居が傾いでいる。そこかしこでせっせと鍬を振るう者は百姓ではなく、じつは家臣かも知れぬ。行く末に不安を覚えた。

秀次郎の捨て科白が浮かぶ。

〝お前なんか一生、加賀に戻らせないからな〟

「俺はここで、飼い殺しにされるのか」

加賀から大聖寺までは十里ほど。通えなくもないが、加賀から百閒長屋とは名ばかりの、ぼろ長屋に放りこまれた。まるで追放の体だ。

兄の家に厄介になっている冷や飯食いの八十助には、ありがたくはある。兄は嫌な顔もせず、兄嫁は親切だ。七歳になる甥も八十助に懐いている。却って肩

身が狭くなるほどに。

ぼろ長屋は四代目の現大聖寺前田家当主、前田備後守利章が住む本藩屋敷敷地の一画にある。

慶長二十年（一六一五年）に御公儀が発した「一国一城令」により、大聖寺前田家の居城は破却され、居館住まいとなった。

敷地はおよそ二万八千坪。北には大聖寺川が流れ、東を正面に据えている。三方を熊坂川の支流を引きこんだ堀で囲み、ご算用場や銭手形役所、お手道具土蔵、改作所、作事所などが大手門脇に配されている。

ひと際高い建物は鐘撞堂と呼ばれる鐘楼だ。前田利明が寛文七年（一六六七年）に建立してから、幾度かの焼失と再建を繰り返している。

「それが何だってんだよ。ようするに城を持てねえ殿さまなんだろうが」

大聖寺は、あくまで加賀前田本家の分家として扱われている。政は常に本家の方針に従い、有事にはすぐさま本家が介入する。

当主の隠居も踏襲もいちいち本家を通し、御公儀に願い出る。当然、江戸屋敷は将軍からの拝領地ではなく、前田本家屋敷の敷地にぽつんと建てられている。

「あああ、参った。俺はこれから、どうなるんだ」

緩やかに蛇行する大聖寺川に着いてはみたものの案の定、釣り人の姿は皆無だ。
上流から魚籠をぶら下げた男子（おのこ）が二人、笑いながら歩いてくる。二人とも尻端折（しりっぱしょり）で、袖をまくり上げた腕や顔が、きれいに日に焼けている。
二人は八十助に笑顔のまま会釈をして、すれ違おうとした。
作法がなっておらぬ。
「某の方ら、待たれよ。某は加賀前田本家家臣、遠野八十助と申す。本日よりしばし、お細工奉行所での務めに携わることとなった」
二人の態度を咎めるつもりで、加賀前田本家を強調した。案の定、片割れは慌てて低頭した。だがもう一人は、妙に人懐こい笑みを浮かべたままだ。
笑んでいるほうの男子がぶら下げている魚籠に目がいった。追い星も鮮やかな鮎が二十尾は入っている。ツ抜けしまくった、といったところか。
「これは二人で釣ったのか」
低頭していたほうの男子が、おずおずと口を開いた。
「いえ。こちらの犬、じゃなかった。えと彌太夫（やだゆう）さまが、お一人で釣られた鮎にございます」
輩（ともがら）同士かと思ったが、萎縮している男子は彌太夫なる者の使用人だろうか。しかし、今の言い間違えは何だ。目を上げると、彌太夫と目が合った。

くるりと丸い目の、愛らしい顔だちだ。二人とも十五か十六、といったところか。
「彌太夫どの、なかなかの手練（てだ）れと見た」
「犬吉（いぬきち）です」
何を言われたかわからず、彌太夫を見返した。
「ご家来衆の皆さまは、わたしを犬吉と呼んでおります。ですから八十助さまも、遠慮せずに犬吉とお呼び下さいな」
涼やかな声で、案外と流暢にものを言う。
「何故（なにゆえ）に、犬吉なぞと呼ばれるのだ」
犬吉は首を傾げながら、肩をすくめて見せた。
「犬吉なる渾名は、わたしが鮎釣りの名人だという証拠です。却って誇らしいかと」
「犬は、鮎なぞ獲らぬぞ」
犬吉が笑った。軽やかな笑い声が、妙に川のせせらぎと合っている。
「これを嗅いで下さい」
魚籠が突き出された。
こんなに間近で釣りたての鮎を見るのは初めてだ。柔らかな香りが立ちのぼる。

「ね、西瓜や胡瓜のような香りがしましょう。これはウラナイさまの香りです。ウラナイさまの縄張りがたくさんある瀬では、この香りがふんわりと漂っています。そんな瀬を見極めるのが、大釣りをするためのコツです」

犬吉は胸を反らせた。目許がほころぶと、いっそう愛らしい顔になる。

隣の男子が言い添える。

「誰よりも鼻が利くから、犬吉と申すのです。ご家来衆はこの香りを嗅ぎ分けられません。犬吉だけの特技にございます」

「申し遅れました。これは俊輔と申します。わたしの家で働いております」

俊輔が、ぴょこんとまた頭を下げた。

「では犬吉どの、と呼ばせてもらう。某の方の父御は何者ぞ。彌太夫なる名は、もしや公家の縁戚か」

「呼び捨てで結構です」

犬吉は何を思ったか、魚籠ごと八十助に押しつけた。

「八十助さまは、ご家来衆の百閒長屋にお住まいでしょ。これをお持ち下さい。新参者なら、点稼ぎになりましょうから」

しれっと生意気な口を利く。生真面目な口調で、俊輔が言い添える。

「犬吉は、宮司の家系にございます。天満神社と申します。大聖寺前田家が敷かれるよりもずっと前から、この地をお守りしてまいりました」

「すると加賀の微妙公さまが飛騨守（前田利常の三男・前田利治）さまに大聖寺を分領される、もっと前からか」

微妙公こと前田利常が利治に大聖寺七万石を与えたのが寛永十六年（一六三九年）。それから七十三年を経て現当主の備後守に至る。

犬吉が無邪気に問うた。

「八十助さま、前田本家のご家来衆は武芸の鍛錬として、鮎釣りをなさっているのでしょ。腕扱きの釣り師がたーんといそうですね」

誰もいない大聖寺川を、八十助は眺めた。

「ここまで酷い体たらくとは思わなんだ。鮎釣りの差配は、小頭が一人でこと足りておる。加賀とは大違いだ」

犬吉が涼しく笑う。

「いつまで経っても下手くそでは、楽しいはずがないでしょ。こちらのご家来衆は、とうに鮎釣りを諦めております。夕餉のお菜に釣れたら上々、くらいなものです」

「どうせ犬吉が、鮎を根こそぎかっさらいますし」

俊輔も笑う。

前田本家家臣は互いに切磋琢磨し合い、腕を上げる気風があった。六十九歳を数える加賀守が壮健で、自らひんぴんと川に入るせいでもある。

「ここの殿さまは、鮎釣りをなさらぬのか」

「たまーに、なさいます。わたしがいい場所を教えて差し上げますが、ちっとも釣れないから、すぐにご立腹されて岸に上がってしまいます」

仰天した。十五歳ほどの犬吉が、当主に釣り場を案内しているのか。

だが言われてみれば、犬吉はなかなかに豪奢な加賀竿を兵児帯に挿している。

「八十助さまは鮎釣りを差配されるのでしょ。近いうちに、殿さまの鮎釣りのお手伝いをなさいましょう。その時にまた、お目にかかれることを楽しみにしています」

二人は跳ねるように、川沿いを下って行った。

入れ替わるように、四十がらみの家臣が三人、竿を担いで対岸を賑やかに歩いている。

「ありゃりゃ、水が減っとるわい。降る時は嫌っちゅうほど降るのに、今度は日照りだわい。ほんにこの夏はどうなっとるんじゃろ」

「こりゃあ、いい垢がついた岩が見つかるかのう」

「まずいなあ、今夜の菜に鮎を釣って帰らんと、また女房にド突かれるわいね。どうせ釣れんけどな」

「俺らはいっつも坊主やさけ」

声高に言い合いながら、川を覗きこんでいる。

八十助は首を傾げた。垢やら坊主やら、何のことだ。

大聖寺では、備後守の鮎釣りの面倒も見ねばならぬらしい。そこは古参の作乃進に押しつけるとしても、垢や坊主を知らぬではすまされぬだろう。

「また作乃進どのに尋ねて赤っ恥を掻くのかよ。勘弁してくれ」

延々とこんな風に、誰にも言えぬ愚痴が溜まっていきそうで、気が滅入る。

四

境内の片隅で、釣り道具の後始末をしている俊輔の耳元に犬吉が囁いた。

「俊輔、面白い講談本を手に入れたよ。わたしの部屋で一緒に読もう」

「竿を磨いて釣り糸を結び直しておかないと。それに、夕餉の仕度も手伝わないと」

「片付けなんか後でいいのに。終わったら、おいで」

犬吉は鮎釣りやら講談本やら道楽に耽ってばかりいるようで、案外と神道学などの勉学を修めている。

とはいえ雨や川の濁りのせいで釣りができない日は、姉たちに混じって琴を爪弾いたり、琵琶をかき鳴らしたりしてばかりいる。

母屋から、喧しい笑い声が聞こえてきた。また姉たちが犬吉に自分たちの着物を着せて遊んでいるのだろう。俊輔が見ても、愛らしい犬吉に女ものの着物は似合う。犬吉はいつも嫌がりもせず、澄まして着せられている。

釣り糸を結び直す手を止めた。今日のできごとを思い返す。

しつこく加賀前田本家を繰り返していた八十助なる家臣は明らかに、大聖寺に来たことを憂いている。はっきりと顔に「げんなり」と書いてあった。

首を傾げた。はて、誰かに似ているぞ。

「殿さまだ。あの辟易しきった顔は、殿さまとおんなじだ」

加賀守の五男として生まれた備後守は、大叔父である三代大聖寺前田家当主・前田利直に養子に出され、大聖寺の当主となった。

加賀前田本家を継ぐ兄、若狭守（前田吉徳）と備後守はたったの一歳違いだ。それなのに百万石と七万石では、腐りたくもなるだろう。端正な顔だちゆえに、見てくれは

立派な殿さまだ。だが、面様や口振りがいけない。

「どうせ予は」が口癖だ。

鮎が釣れない、風邪をひいた、猫が逃げた。何があっても、陰気に「どうせ予は」とぼやく。家臣らがふざけて口真似をしている様子を幾度も見た。

「それをいうなら、ご家来衆もだけどさ」

大聖寺の家臣団には無気力がこれでもか、と蔓延している。備後守が始終、くすぶっていては致しかたないだろう。

鮎が遡上する初夏の頃には、家臣もちらほらと川にやって来る。だがなかなか釣れないと、すぐにだれる。

「ご家来衆の皆さま、もう少し、粘ってみましょうよ。すぐに諦めるから一向に上達しないのですよ」

一人だけ大釣りをしている犬吉が誘っても、家臣はぐだぐだと河原に寝そべっている。

「何を。宮司の息子が偉そうに。お前に説教をされる謂れはないぞ」

ますます不貞腐れる。

「それもそうね」

犬吉は涼しい顔で聞き流し、軽やかに瀬を遡って消えてしまう。

母屋へ目を向けると、犬吉の父である彌源治が供物を載せた三方を掲げ、御堂へ向かう姿が見えた。夕餉の前に必ず、彌源治は供物を運ぶ。鳥居を潜ってすぐ右手にあるご祈禱所の隣に、〝ウラナイさま〟のご本尊を祀った小さな御堂がある。出入りができるのは、彌源治と犬吉だけ。

ご本尊について尋ねても、犬吉はいつも「ウラナイさまはウラナイさまさ。それしか言いようがないな」と、はぐらかす。

ウラナイさまは鮎のことだけれど、まさか魚をご本尊にしているはずもない。俊輔は面妖に思いながらも、それ以上、上手く問えない。いかにも犬吉らしい返事だから。

深く笠を被った客人が彌源治とともに御堂に入ってゆく日もある。それも払暁など参拝者がいない刻に限られる。何となく憚られて、怪しい客人についても誰にも問えない。

薄闇が周囲の山を影にしてゆく。山々を覆う杉から、細かな霧が降ってくる。この刻になると、渓声がいっそう杜を包む。

彌源治の鶯色の狩衣と渡り廊下に設えた灯明の灯が、うすぼんやりと溶け合う。

ふと彌源治が振り返った。突っ立って眺めている俊輔に気付くと、にっこりと笑んだ。柔らかな目尻が、犬吉とそっくりだ。

「やあ、俊輔。今日も犬吉の相手をしてくれてご苦労だね。お前さんも早く夕餉をすませて、犬吉と一緒に湯殿をお使いなさいよ」

とても神職とは思えぬ軽やかな笑みを残し、御堂へ向かう。

この家にきて六年。犬吉をはじめ、どこか妙な家だと俊輔はいつも思う。

けれど、ここはとても居心地がいい。

五

川から戻った八十助は、鮎釣りの道具の差配について作乃進から指示を得た。指示は四半刻も要さずに終わった。

一つだけ、よくわかった。大聖寺の家臣の道具立ては劣悪だ。

加賀では加賀竿と呼ばれる継ぎ竿を使う。竹を短く伐り、二本から三本継ぎの竿をお細工者が作る。

その竹の吟味には、とほうもなく細かい決めごとがある。

漢竹がもっとも適しているとされ、紫竹や豊後竹がそれに続く。竹を伐る頃合いは、

草木に気が満ちる満月はご法度。竹に籠る気が薄い、新月に採取する。気が薄ければ虫がつかず、しかも竹が乾きやすい。先人からの言い伝えだ。

伐った竹は天日や囲炉裏の上で干し、堅く締まった琥珀色にする。竿の先端にあたる部分は、逆さまに干して曲がりを直す。

だが大聖寺の家臣らは、七夕かと見まごうような太い一本竹を担ぐらしい。

「加賀では、かような竿を使いまする」

八十助は持参した竿を作乃進の前に置いた。幾重にも塗り重ねた加賀漆が、枯茶と漆黒の模様を輝かせている。

「継ぎ竿は毛鉤を鮎が食うた時の、幽かなアタリを手にしっかと伝えまする」

「ツ抜けも追い星も知らんと申しておったが、道具立てはさすがに詳しいの」

両手を背後につき、仰け反りながら作乃進は安堵の息を吐いた。

「何にせよ、よかった。いやはや、助かったわいね」

意味がさっぱりわからぬ。作乃進が、にんまりと笑んだ。

「殿さまが川へお入りになられる際、たいていは犬吉なる若者が見物に来る」

「その者なら、先ほど大聖寺川で会いました」

「あれは随一の腕前よ。鮎の所在から釣り方まで誠に明るい。なれど、それを懇切丁寧に殿さまに教えぬが難点わいね。〝ほら殿さま、そこに鮎がいるでしょ。何でわかんないのかなあ〟てな具合やさけ、殿さまは〝どうせ予は〟と、むくれて帰られる」

犬吉のすっとぼけた様子を思い返す。胆が太いのか鈍いのか、判然とせぬ。

「某は務めゆえ、殿さまの釣りの世話も致すが、いかんせん水が怖い。幼い頃、大聖寺川で溺れ死にそうになってな、できれば河原にも近づきたくないわい」

嫌な想念が湧く。

「向後は八十助どのに殿さまの世話を任せよう。犬吉を存じておるのなら、奴の口の悪さを咎められるさけ」

そんな重責は真っ平ご免だ。八十助は慌てて身を乗り出した。

「暫時。新参者に殿さまの世話なぞ、無理に決まっておりまする。ほかの者に任せるが賢明かと」

「いやいや皆、某と並ぶ体たらくよ。側近中の側近、人持もおるが殿さまの鮎釣りの際は警固の指揮を執らねばならぬからのう」

人持といえば、家老に次ぐ重臣だ。だからといって、何で俺が。

「のう、八十助どの」

作乃進が周囲に目を遣り、声を低めた。

「殿さまは、本当は鮎釣りがお好きなのでは、と思うのじゃ」

さらに顔を近づける。

「犬吉にけなされてお怒りになっても、数日も経てば性懲りもなく川へ行かれる。それはもう、健気なことだわいね」

胸中で首を傾げた。釣れぬくせに釣りに行く。挙げ句、立腹して帰る。その繰り返しとは。釣り人の心持は、どうにも解せぬ。

周囲の家臣が二月堂机を片付け、世間話に興じながら仕舞い支度を始めた。

「では後はよろしゅう」

作乃進は、せいせいとした足取りで座敷を出て行った。

ふと加賀竿に目がいく。竿尻を傾けると、竿先にあたる細い継ぎが、するりと出てくる。入れ子のように継ぎ竿をしまえるため、嵩ばらずに持ち歩ける。加賀では元禄の頃より、江戸仕込みの竿師を呼び、煌びやかな漆塗りを施した加賀竿を完成させた。

大聖寺でも継ぎ竿を取り入れたら、皆がもっとやる気を起こすのではないか。一本竹と継ぎ竿では天と地の差があると、ここの家臣は知らないのであろう。

「さらには毛鉤か。待て待て、さすれば道糸と鉤素もか」

竿先から垂らす糸は、道糸と呼ばれ、加賀では絹や木綿、馬の尾を使う。道糸の先

端につなぎ、毛鉤を結ぶ鉤素には天蚕糸を使う。

盛期の鮎は力が強い。毛鉤を飲みこみ、横に走る鮎がいれば深みに突進する鮎もいる。しなやかな継ぎ竿と、質のよい糸は欠かせぬ。

「なれど貧乏揃いの大聖寺で、どうすりゃいいんだ」

仰向けに引っくり返った。今頃、加賀では雪之丞が女の腰に手を回し、振舞茶屋にしけこんでいるだろう。忠兵衛は紗江と膳を囲んでいるだろうか。腹がぐう、と鳴った。

「そういや、犬吉から鮎をもらったな」

家臣に点稼ぎなぞする気もない。一人で食ってやる。笊を抱え、ぼろ長屋に向かった。

八十助の両隣に住んでいるらしき、年嵩の家臣が揃って庭に突っ立っていた。確か柿右衛門と市之介といったか。

「ご両人、如何なされました」

二人は同時に八十助に胡乱な目を向けた。

「八十助どのは独り者であろう。早々から気ままな真似は慎んだほうがよいぞ」

「大聖寺はさほど堅苦しい規律はないが、初めが肝心と申すからの」

わけのわからぬ文句を並べ、八十助の部屋を振り返る。油障子の向こうに灯りが透けていた。

「俺の部屋に、誰がおるのだ」

二人を押し退け、八十助は勢いよく腰高障子を繰った。

「お務め、誠にご苦労さまでした」

つんと澄ました紗江が、板敷きで膝を揃え、ちょこんと頭を下げた。

六

「何でお前がここにいるんだ」

「いてはいけないの」

「どうして俺の部屋がわかったんだ」

「たまたまお隣のご家来さまが通りかかったから尋ねたの。粘りに粘ったら、渋々と教えてくれたのよ」

紗江は八十助の詰問などとうに想念していたらしく、澄ましたままだ。その背後には大きな背負子がある。

「その莫迦でかい荷はなんだ」

「加賀竿に毛鉤に釣り糸やら、いろいろ。おとっつぁんに持たされた」

「お前が運んで峠を越えて来たのか」

「手代さんに運んでもらったの。もう帰したけど」

「何で一緒に帰らなかったんだ」

「うるさいっ。こっちに飛ばされても居丈高な態度はちっとも変わらないのね。おとっつぁんが八十助を案じていたから待ってたのよ。あたしはあんたなんかどうでもいいけど、おとっつぁんは気を揉んでるのよ。少しは察しなさいよ、莫迦が」

紗江はさっさと荷を解き、釣り道具を並べていく。と、八十助が抱えた竿を見やる。見る見る頬を緩めた。

「あら、大聖寺にもこんなに立派なウラナイさまがいるの。犀川の鮎よりもいい型をしているかも。まさか釣り嫌いの八十助が釣ったの」

八十助は竿を放り出した。紗江がいると、どうしても加賀での暮らしが思い返される。

「犬にもらった。欲しけりゃそれを持って、とっとと帰れ」

「何よ、犬って。夕餉はまだでしょう。すぐに塩焼きと鮎の炊きこみご飯にするから

待ってなさい」

慌てて腰高障子を振り返る。とうに暮れきっている。

「何を暖気なことを抜かしやがる。もう暮れ六ツ（十九時頃）になるぞ。早く帰れ」

紗江は笊を取り上げると土間に降り、慣れた手つきで鮎を洗い始めた。

「今日は泊まる。おとっつぁんがいいって言ったから」

「ばっ」

親子揃ってどうかしている。

「八十助だっていまだに始終、あたしの家に泊まりに来ているでしょ」

「あれは冷や飯食いの俺を気遣って、親父さんが呼んでくれるからだ。それを言ったら雪之丞だってひんぴんと、お前の家に泊まっているだろうが」

「だったら、あたしもここに泊まっていいはずよ」

返事を待たずに勢いよく米を研ぐ。

「大聖寺のご家来衆は、どんな塩梅なの」

紗江が問いながら、釣り道具にちょっと目を向ける。

「こっちには大した針屋も糸屋もなかろう、っておとっつぁんが憂いていた。八十助のお務めに差し障るだろう、って。毛鉤はうちの品だし、糸も信用が置けるお細工者

から仕入れている。竿も要りようなら面倒みるって。おとっつぁんは、商売っ気を出しているわけじゃないわよ。何なら貸し出してもいいって」

「親父さんはこっちの道具立てについて、お見通しってわけか。けどよ、こっちの連中はやる気が毛鉤の先ほどもねえよ」

板敷に寝そべった。総身にわたる疲れさえ、不毛に思える。

「《加賀針忠兵衛商店》の品なんざ、誰もわからねえよ。竿だって、各々がそこいらの竹を引っこ抜いて使ってやがる。持ってくるだけ無駄だ」

肩肘を立てて寝そべっている八十助の肩を、紗江が揺すった。

「八十助、酷い顔をしている。ご飯を食べたら、早くおやすみ」

鮎が焼ける香りが漂う。炊きこみご飯の湯気も鼻先をかすめる。先ほどまで腹が鳴っていたが、今はその香りさえ、むかむかする。

焼き目のついた鮎を米に載せ、醤油を垂らして炊く鮎の炊きこみご飯は、幼い頃から八十助の好物だ。武家からもらった鮎を、紗江の母はいつもたんと炊いてくれた。八十助と雪之丞、紗江は競い合って頬ばった。

「食べられないなら、おむすびにしておく。明日のお弁当にすればいい。ほかのご家来衆がきっと、羨ましがるわよ。あたしの炊きこみご飯は、おっかさん譲りだか

らね」

頷く気にもなれぬ。出口も光明も見えぬとは、こんなに息苦しいものなのか。

「明日、この道具をお細工奉行所のみんなに見せたらどうかしら。こんなにきれいな加賀毛鉤を見たら、きっと奮い立つはず。誰だってこれで鮎釣りをしてみたくなるわよ」

努めて明るい声で勧める。己を気遣っているとわかる。わかるから、鬱陶しい。鬱陶しく思う己が嫌たらしい。

無言で夜具を引っ被った。

紗江は何も言わなかった。炊きこみご飯を握っているのだろう。ふんわりと醤油の香りが夜具の中に沁みこんでくる。

七

払暁、八十助は眠さを堪え、紗江を峠の麓まで引っ張っていった。

「また来るわ。今度は大聖寺川を案内してよ」

「何がまた来るわ、だ。来るなら、一昨日にしやがれ」

「おとっつぁんと雪之丞には、八十助は相変わらず居丈高で莫迦で腐りきってる、と伝えておくから安心しなさい」

しれっと言い放ち、峠に去っていった。

「これはこれは八十助さま。お早い刻から、どなたかのお見送りですか」

涼やかな声に振り返ると、犬吉がにこにこと立っていた。傍らに二十歳ほどと思しき男が立っている。腕も胸も見事に張り、色濃く日に焼けている。

「ただの迷惑な客人だ。お前こそ、何をしておる。俊輔とかいうのはどうした」

「俊輔は女中さんたちの手伝いをしております。そんなことはしなくていい、と父上はいつも申しますが、俊輔はかっちかちのこっちこちなのです」

八十助の目路に気付いたか、傍らの男を見上げる。

「こちらは村三役の一つ、百姓代の六郎さんです。村のことで何かと父上が相談に乗っております。六郎さん、こちらは加賀からいらした、お細工奉行所小頭をお務めの八十助さまです。仕事の前に川の様子を見に行こう、と六郎さんに誘われたのです」

六郎は人懐こい笑みを浮かべ、会釈をする。

大聖寺川を眺めながら犬吉が呟く。

立ち読みサンプルはここまで